

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	終末期におけるリハスタッフのかかわり ～これからの展望～
演者名	清水美知留
所属	上伊那生協病院 訪問リハビリテーション課

目的

以前、脳腫瘍末期の患者様の在宅でのリハビリを経験した。意思疎通が出来ない状況で妻は「車椅子に乗せて小 1 の子供を含む家族とご飯を一緒に食べさせたい。お風呂に入れてあげられない代わりに毎日体を拭いてあげたい。」と願い、熱心に介護されていた。

移乗等の介助方法に困りリハビリを依頼されたものの、みるみる状態が悪化し寝たきりになっていくところを、私は見ているしかなかったことを思い出す。

そしてまた新たなケースに出会い、終末期のリハスタッフの関わりについて考える機会となった。

実践内容

医師には「数日のいのち」と宣告されたが自ら退院を決意。「うちで寝たきりではつまらない。

一日 3 回は起き上がって座りたい。」と希望し、退院直後からリハビリを始めた。体調に合わせて本人の思いに寄り添った。起き上がることが精一杯である方が、リハビリの時には歩く練習まで行え、リハスタッフの来訪が楽しみにもなった。また何かに挑戦してみようという気持ちが生まれる。

それから自らの意思で今までお世話になった方々を訪ね、最期に自宅 2 階にある書斎に上がり家族との時間を楽しんだ。

実践効果

終わっていく人生を自らプロデュースするという偉業を成し遂げ、退院時に思い描いたものをはるかに上回る最期の時間を過ごすことができた。「リハビリ」が生きる希望に繋がった。

考察

我々リハスタッフは最期までその人らしく人生を全うできるよう導けるような存在でなければならぬと学んだ。そしてそれを支えるご家族の思いをも大事にし、その人を共に支える立場でありたいと感じる。